

<論 文>

ユカタンにおける現代グレミオとその儀礼

吉 田 栄 人 (広島大学大学院)

SUMARIO

Shigeto YOSHIDA: "La memoria ritual de los gremios contemporáneos en Yucatán"

En el presente artículo se pretende dar un origen hipotético de los gremios contemporáneos en Yucatán, analizando los rituales y las organizaciones administrativas que están separadas técnicamente, no siendo el presidente del gremio, organizador del rosario, su principal objetivo, dedicado a su santo patrón.

Desde el punto de vista cosmológico maya, según informes etnográficos sobre los mayas en Chiapas y en Guatemala, a los organizadores de fiesta se les amalgaman los valores sociales, por los cuales se procuran sacrificar financieramente, hasta que estos sacrificios individuales se transformen en una jerarquía social. En este sistema social el financiar una fiesta constituye un hecho social que está orientado culturalmente (la cultura misma se refuerza por este hecho social) a no retroceder en el punto de desaparecer, hasta que se deje de celebrar la fiesta.

Por el contrario los gremios yucatecos se dejan desaparecer fácil-

mente en la crisis financiera. Es claro, sin embargo, que todos los gremios tienen sus medidas de complementar las faltas financieras a fin de realizar, a toda costa, la meta como una institución religiosa, ya que es una manera esencial de manifestar el culto con los santos cristianos en Yucatán, donde se dice “cumplir la promesa con el santo” al dedicarse en las fiestas religiosas.

Si no es inoportuno hablar de la sobrevivencia del gremio como un hecho social, que no está necesariamente en virtudes del fenómeno financiero sino que constituye un fenómeno cultural, se dará a conocer que la separación entre el organizador y el presidente es una consecuencia necesaria para rescatar los gremios en la crisis financiera, la cual está programada en la memoria ritual de los gremios y lo que implica el momento de surgir el gremio como estructura de la conciencia en el pueblo yucateco.

はじめに

今日、ユカタンに広く見られるグレミオを理解するには、レッドフィールドの『ユカタンの民俗文化⁽¹⁾』よりもディエゴ・デ・ランダの『ユカタン事物記⁽²⁾』の方がはるかに役に立つかも知れない。『ユカタン事物記』に記されたウァイェブ uayeb の祭儀⁽³⁾は、現代のグレミオと多くの共通点を持っている。主催者の選出、そして彼の家を起点とするプロセッション。人々はプロセッションに追き従い、踊り、そして特別に用意された食事をふるまわれる。400年の時代差を隔てて展開される二つの宗教儀礼は、偶然の一致の産物なのだろうか。グレミオに集う人々は『ユカタン事物記』を読んでいない。彼らは、自ら弁明するように伝統に従っているだけなのである。では彼らの言う伝統とは一体何なのか。彼らの知る伝統はおそらく1ないし2世代前のものではない。だがそこに伝統という入れ子構造が生じる。2世代前の人も同様に

2世代前の伝統を受け継いできたのである。人々が伝統を記憶し伝えるというよりも、伝統が人々を通して記憶されていくのである。世代の交代は記憶の更新を意味しているに過ぎない。ここで、伝統の連続性について語ることは両義的である。むしろ、それは、本来記憶が一定のパターンに支配されていることの謂いにすぎない。つまり、記憶は文化の構造に表われるマンダラ模様であり、特長的な長さを持たないフラフラ次元⁽⁴⁾であるが故に、歴史を手懐け自らの領域を拡大していくのである。ウェイェブの記憶が400年の歴史を越えて人々の想像力に介入する所以であろう。

ユカタン州北西部の中都市を中心に発達しているグレミオは、守護聖人の祭りに際して一夜のロザリオの祈りを捧げることを主目的とする祭祀集団である。グレミオの守護聖人は殆どの場合村の祭礼が捧げられる聖人・聖母に一致し、各グレミオ毎に勝手に守護聖人を選択することはできない。その結果グレミオの数が増えれば増えるだけ祭礼期間は延長されていくのである。公の場に姿を現わすグレミオはその規模に大小の違いがあるほか、各グレミオの趣向がわずかに凝らされているだけで見る者の目を麻痺させてしまう。しかし、その変化の少ないグレミオも一夜のロザリオの祈りを実施するためには三者三様の運営努力がなされるのである。中には予約がしてありながら、結局資金繰りができなかつたために姿を現わさないグレミオさえ存在する。グレミオは常に存亡の淵にあるといっても過言ではない。あるいはその淵からの脱出の試みそのものがグレミオなのかもしれない。そこで本稿では、グレミオが如何に運営されているのか、その比較研究を通じて存亡の淵からの脱出の試みを一つの文化的現象として捉えてみたい。ところで、グレミオが一つの文化的現象として捉えられた時、我々はその存亡の淵が単に民族誌的無時間におけるカオスから文化への移行点だけを示すものなのか、それとも歴史的発生の起源とも関連しているのかという疑問を持つことになる。本稿の関心は、むしろこの後者の可能性の探究に向けられている。文化が記憶である時、我々は記憶の内に文化の歴史への介入の痕跡を読み取ることができるのではないだろうか。

Ⅰ. ユカタンにおける祭礼の現状

表1はカンサカップ Cansahcab 村における 1986 年度の東方の三賢人祭の行事日程である⁽⁵⁾。村⁽⁶⁾の公式行事としての三賢人祭の始まりは 1 月 3 日のバケリーア *vaquería*⁽⁷⁾からであるが、それより 4 日早い 12 月 30 日からグレミオの活動が始まる。近隣の村々に配布された公式行事のプログラムにグレミオという文字はあっても、グレミオの活動は祭礼の組織からは独立しているのである。カンサカップ村で三賢人祭を組織運営したのは闘牛場の建設、役場のホールのバケリーアと社交ダンス *baile popular* への使用、ソカロの夜店設置、ビールの販売等に関する一切の権利を 125,000 ペソで役場から買い取った競り落とし請負人 *rematador* であった。彼は企画からバケリーアや社交ダンスのための楽隊、闘牛士、夜店設置の契約等までを行なうだけで、宗教儀礼には直接関与しない。彼は闘牛場の建設権利金⁽⁸⁾、バケリーアと社交ダンスへの入場料、ビールの売上等によるある程度の利益を上げることを最終的な目標としているのである。グレミオにしても個々に教会へミサを依頼するだけであり、グレミオ相互間の繋りもなければ、競り落とし請負人との契約も結ばない。

現在のユカタンの祭礼において村レベルでの組織とグレミオの組織は実質上分離している。しかも村レベルでの祭りが娯楽としての側面を強調すればする程、人々はグレミオ等に信仰の表明手段を見出していかのようですらある。人々は聖人への信仰⁽⁹⁾を「約束」*promesa* を果たすことで表明しようとする⁽¹⁰⁾。聖人に捧げ物をする、プロセッションに参加すること、グレミオに加わる、聖火 *antorcha* を持って走ること⁽¹¹⁾等全て聖人との「約束」を果たすことなのだと言はれる。しかも、それらは全て個人もしくはグループを単位として行なわれる。そこに祭礼は、村全体の企図としての性格を失っていると言わねばならないであろう。競り落とし請負人はもはや村の代表者でもなければ、主催者として特別の社会的代償を得る権利も持たない。彼は、人々が「約束」を果たす唯一の機会をお膳立することによって、

多少の商業的利益を得ることを許されているに過ぎないのである。

しかし、今日ユカタン全ての祭礼にこの競り落とし請負人が介在する訳ではない。競り落とし請負人が登場するのは、当然ながら役場が祭礼に関する権利を売却する場合だけに限られる。祭礼を主催許認可する権利は村役場 ayuntamiento に帰属しており、祭礼が実際どのように組織されるかは各村役場の自由裁量に任されるのである。可能性として、①役場は祭礼には一切関与せずただ許可を与える場合、②祭礼に関する一切の権利を売りに出す場合、そして、③役場が一切の権利を保持し役場で主催する場合の3つが存在することになる。競り落とし請負人の登場はこの内の一つに過ぎない。しかし、傾向として、今日競り落とし請負人の登場が支配的となりつつある。ただここで競り落とし請負人登場の構図を考えたとき、祭礼主催権利の役場への移行だけで説明し尽くすことはできない。それには役場の置かれている状況をも十分加味されねばならないであろう。役場に、祭礼に介入する意志があるのかあるいはその必要性があるのか。仮に伝統的な祭礼の主催者が存在せず、役場にその主催の意志がないとき、競り落とし請負人の導入は極めて簡単に、しかも事務的に処理されてしまうであろう。

II. 信仰・希望・慈悲グレミオ

次に、グレミオが実際にどのようなことをするのか、民族誌的な記述で紹介して置きたい。事例はカンサカップ村、東方三賢人の「信仰・希望・慈悲グレミオ」からである。

12月30日丁度正午、教会の方角から12発の花火が揚がる。それに応えるかの様に村の南側から2発の花火が揚がる。その後も花火は不定期に揚がり続ける。

1時半、3発。

1時50分、2発。

3時、1発。

3時10分、5発。教会でも5発、まったく別の方向からも5発。

3時30分、3発。

4時、1発。

4時10分、2発。

・
・
・

風に流されるにしても花火の揚がる音は、村の南方向のある一ヶ所から聞こえてくる。

正午の12発は、あるグレミオの始まりを告げるものであった。そのグレミオが今年迎え入れられる家では、グレミオの仲間達が集まり、今夜の宴会の準備に余念がない。女性は料理係、男性は花火の打ち上げ、客の接待等と仕事の分担が決まっている。家の中庭には折り畳み椅子が中央を向くように並べて置かれている。片隅の木陰には、アルト・サクソ、トランペット、トロンボーン、ドラム各一個で組まれた楽隊が陣取っており、招待客の到着毎に一曲ディアナ *diana* を演奏する。また招待客の到着に際しては、花火も1～3発揚げられる。一方、この家を訪れる人にはオルチャータ⁽¹²⁾が必ず勧められる。ビールの販売を許可されなかったこのグレミオではアグアルディエントが用意され、男性の間で汲み交わされる他、楽隊や招待客にも振る舞われる。

招待客は、他の村のグレミオから派遣された代表使節 *delegación* であり、彼らのグレミオの名称と信仰聖人の像の刺繍の入った聖旗 *estandarte* を必ず持ってくる。この聖旗は、当グレミオの聖旗ややはり刺繍の施された大きな国旗 *pabellón* と一緒に、広げて家の中の壁に立て掛けられる。また到着に際して、代表使節は熱い抱擁と伴に必ず持参金 *aportación* を供出する。この持参金は、これを届けたグレミオが同様の祭りを行なうときに、ある程度の上乗せをして返さねばならず、祭りの費用の前借りであるとも言える。上乗せ率はそのときの経済状態にも依るが、大体一割と考えられている。この上乗せ金は、もちろん前借り金に対する利子に相当するものであるが、その様

な賃貸を意味する取り決めは一切存在しない。形式上この持参金は聖人に対する奉納金とも見なされ、返却は必ずしも期待されていない。むしろ、それを受け取ったグレミオの名誉と威信において返礼される人類学的交換の論理に従うものである。これによって更なる持参金の継続が保証されているのである。

午後6時近く、総指揮者 *director general* の指図によって、聖旗や国旗が持ち出され道路上に一列に並べられる。先頭には30 cm位の大きなロウソクを持った女性や女の子達が立ち、その後ろに国旗・聖旗を持った人がその順番に並ぶ。そして最後尾に先程まで家の中庭で演奏していた楽隊が付く。

花火の合図と共に、グレミオの一行は教会へ向かって歩き出す。花火の束を抱えた数人の男性が先頭を歩き、曲がり角あるいは数区画行く毎に花火を揚げ、グレミオの通る道筋を内外伴に知らせる。その後ろを10 m位離れて総指揮を中心とした役員会の男性数人がグレミオの一行を誘導する。グレミオの最後尾では楽隊がマーチを演奏し行進のペース・メーカーを務める。

グレミオは、教会の鐘が鳴り響く中、教会正門入口に到着すると、神父から祝福 *bendición* を受ける。彼らは教会奥に進み、説教台前に膝間づく。神父からグレミオ預かりの言葉を受けた後、聖旗、国旗、ロウソクがまとめられて、さらに奥の壁に立て掛けられる。この間、教会の外では楽隊がハラーナを演奏し、全てが終わって人々が出てくると残った花火が全部打ち上げられた。人々は一但家に帰って、8時に再び教会に集まり、ロザリオの祈りを上げるのだと言う。ロザリオの終わりには再び花火が華々と打ち上げられ、その夜グレミオが後にした家では小バケリーアが催される。

翌朝、夜が明けるにはまだ程遠い午前4時、楽隊も含めて10数人の男女がバケリーアの終わったばかりの家前に集まった。3人の女性がテルノを着ている。彼らはこれから、昨年グレミオを迎え入れた家ホッチリ *jochili* (スペイン語では *ramillete*⁽¹³⁾ と呼ばれる) を取りに行くのである。

まず家の前の路上で、ハラーナが一曲演奏され、テルノを着た女性と普段着のままの男性の三カップルが踊った。目的の家まで、道筋が変わる度に花

火が揚げられる。家に着くと楽隊と先程の踊り手たちが先に家の中へ入り、2人の男性がホッチリを持ち、残りの一人が料理されお盆に載せられて飾りを付けられた豚の頭を持って、女性の踊り手達とハラーナを踊った。ここでは、バケリーアで踊られる通常のハラーナの曲目に加えて、豚の頭を運ぶ儀礼に際してのみ踊られるという『豚の頭』の曲も踊られた。

その場での一興が済むと、全員外に出て、花火を合図に教会へ向かう。中途ハラーナがずっと演奏され、ホッチリおよび豚の頭を持った6人の踊り手が踊りながら先頭を進む。中でも豚の頭を持って踊る男性パートナーは両手に小さなひょうたんの殻にトウモロコシの粒を入れたマラカスを鳴らしながら彼らの先頭に立つ。彼らは数区画行く毎に立ち止まり、そこで数曲踊る。こうして彼らは教会へとやって来る。教会に着くと閉じられた入口の前で2曲マニャニータスが演奏される。その後人々は役場のホールに移り、そこで再び一通りの曲目とそして最後にバケリーアの最後の曲である『エル・トリート』が踊られた。これが済むと、今度は前日グレミオが通った道筋を逆方向に辿りながら、先程ホッチリ迎えの一行が出発した、すなわち前日グレミオが出発した家へ向かう。通りに面した家々の入り口には、打ち上げ花火のけたたましいさく裂音と楽隊の作り出すちょっと調子外れのハラーナの不協和音に安眠を妨げられでもしたのか、ドアにもたれてホッチリの行進を見送る人の姿がいくつも見受けられる。

ホッチリが家に着くと再びフィエスタの始まりである。参集した人々にはオルチャタ等の飲み物が配られ、先程までの6人の踊り手に代わって他の人々も踊り出す。まだ夜も明け切らぬ5時半である。東の空が漸く白み出した7時近く殆どの人々はすで引き上げ、中庭のあちこちではグレミオ迎え入れの準備が始められている。

10時少し前グレミオ迎えのため、仮眠をとっていた楽士たちが起こされる。半分酔っ払って疲れている楽士たちが支度するのに手間取っているのに対し罵声を浴びせつつも、グレミオの会長 presidente をはじめ花火の束を抱えた人達は一足先に教会へ向かう。10時を少し遅れてミサが始まった。この

ミサは主として、このグレミオの成員であった故人へ捧げられたものでありミサ料が支払われている。ミサを半ばにして、最後尾に座っていた会長は疲労の余り眠り込んでしまった。会長はこのグレミオの下準備から後片づけにかけてさらには会計報告のために2日間徹夜をする程なのだという。

ミサが終ると聖旗や国旗等が説教台後ろから取り出され、前日入ってきた順とは逆に、出口に向かってロウソクを持った子供達を先頭に一列に並べられる。グレミオの行列が出口まで顔を出すと控えていた楽隊が高らかに演奏し、花火が20~30発揚げられる一方、教会敷地内で縄花火に火がつけられ大音響が辺りに響き渡る。グレミオは教会を出ると前日とは別の道を通して、前日と同じ様に花火の合図と楽隊の演奏に誘導されて前日出発した家へ向かう。沿道ではただ見送る人もいれば、グレミオの後ろに付いて行く人々もいる。その多くは子供か自転車に乗った若者たちである。グレミオの入る家では必ず *tacos de cochinita* などの御馳走にありつける。またその家でも全ての来客者に対して御馳走を振る舞うのが決まりなのである。

グレミオが家に到着すると再び踊りの始まりである。楽隊はハラーナだけでなく愛敬でトロピカル音楽も演奏して見せる。間もなく家の中にしまわれていたホッチリが取り出されハラーナが踊られた。ホッチリにはタバコやパンなどが吊されている。これは踊りの後に集まった人々の間に分け与えられるのである。ただしそれを受け取った物は次の年の祭りで同じ物を2倍にして返さねばならない⁽¹⁴⁾。

細かい点においては、地域差あるいは同一村内でもグレミオ毎の違いが多見られる。例えば、カンサカップ村の中でもグレミオが最初教会へ向かう際に出発する家は前年度の主催者の場合と当年度の主催者の場合がある。そして、グレミオの教会への出入りは、フヌクマー *Hunucmá* 村のように12時丁度に行なわれるものと夕方教会に入り翌日午前中に教会から出るものとの2つの様式が存在する。代表使節の派遣は北西部を中心に発達したものである。『豚の頭ダンス』を行なうグレミオもあまり多くはなく、その踊られ方に

しても多様である。フヌクマー村においては夕方に行なわれ、フヒーHuhí村においてはグレミオが教会から主催者の家に迎え入れられる際にグレミオの行列に先導する。ホッチリにしても多くのグレミオで見かけられるが、『豚の頭ダンス』を含む一連の行為を指してホッチリと呼ぶ村は数少ない。以後本稿では、この一連の行為をホッチリ(ラミジェテ)から区別するためにホッチリ儀礼と呼ぶものとする。これらの異同はあるにせよ、楽隊や打ち上げ花火、聖旗、国旗等を伴ったプロセッションの教会への出入り、ロザリオの祈り、主催者の家での小宴という点では全てのグレミオに共通であり、逆にそれらを満たしていればグレミオと呼ばれるのである。

III. グレミオの起源

1. グレミオとコフラディア

今日ユカタンに見られるグレミオは、同業者組合としてのグレミオだけでなく、教会に属し聖人信仰を目的としたコフラディーア *cofradía* にその直接の起源があると思われる。そこでこの節では現在のグレミオとかつてのそれらの組織との関係について少しばかり触れて置きたい。

グレミオとコフラディーアは別個のものとして新大陸にもたされたが、実は同一起源のものであり、その組織の置かれた社会状況と組織の目的の違いによって分化して行っただけに過ぎない⁽¹⁵⁾。グレミオは経済的・社会的付帯状況を強調したものであり、コフラディーアは宗教的側面において特科したものである。つまり両者は最初から全く異なるものとして分化したのではなく、その置かれた社会状況に応じてあるいはその結果としていずれかの側面にアクセントを置いているに過ぎないのである。裏を返せば、グレミオとコフラディーアが区別されねばならないのは、両者が共存しておりしかも両者は社会状況上区別する必要性がある場合だけに限られる。

16世紀の征服後まもなく、当時イベリア半島にあったものをモデルとして導入されたコフラディーアとグレミオは、その導入の目的と新大陸における発展の過程において様相を少なからず異にしている。グレミオは、専門職の

発達と合間って都市部においてのみ存在した。例えば、メキシコ・シティーには次のようなグレミオが作られていった。絹物業 (1542年)、刺繍職人 (1546年)、馬具職人 (1549年)、紐職人 (1550年)、鋳金職人 (1557年)、靴職人 (1560年)、帽子職人 (1561年)、なめし皮職人 (1565年)、毛織物職人 (1592年) など⁽¹⁶⁾。他方コフラディーアは主として修道士たちの手によって現住民のカトリック教化さらにはその強化の手段として利用され、多くは現住民社会に作られていったのである⁽¹⁷⁾。

ここで注目しなければならないのは、グレミオとコフラディーアは人種による分離を強調する社会制度としても機能していたことである。グレミオは、実質上スペイン人とクリオージョだけの排他的な集団を成していた⁽¹⁸⁾。コフラディーアでも都市部にあっては、同様に特定の人種内部で形成されていた⁽¹⁹⁾。一方で、このような状況が現住民社会内部での統足を促したであろう可能性を無視する訳にはいかない。チアパス高地でカスタ戦争にまで発展していった一連の千年王国主義的運動はその極端な事例であろうか⁽²⁰⁾。しかし一般に、現住民社会のコフラディーアが既存の社会関係をベースとして形成され、それを一層強めていったことは事実である⁽²¹⁾。そして何よりもコフラディーアを社会的ネットワークに繋ぎ留めていたのはその運営であったと言える。白人社会のグレミオ、コフラディーアは成員の分担金出資によって運営されていたのに対し、現住民のコフラディーアは「共同体金庫」*caja de comunidad* をはじめとする共有財産を所有し、その財源のうちから税金等の支払も行なわれていたのである⁽²²⁾。おそらくこのような運営は土地を基盤とする社会関係のネットワークなしには不可能であったであろうし、またコフラディーアという制度に現住民が新たな統合の契機を見出していった過程を示しているのである。

このように現住民社会に根を降ろして行ったコフラディーアも、ユカタンの場合ブルボン改革後のスペイン王室による現住民社会の直接統治とアセンダの形成の中で破壊されてしまう⁽²³⁾。しかし、コフラディーアの解体はコフラディーア財産とそれに基礎を置く社会組織の解体を意味したのであ

て、コフラディーア精神の解消と同義ではなかったはずである。そこにコフラディーアに類似した組織が新たに作られる可能性は充分残されていたであろう。他方同業者組合としてのグレミオは、メキシコではカディス憲法及び独立後の自由主義改革によって、1861年法律上全廃されている⁽²⁴⁾。

2. ノベナリオ

グレミオの構造上にその起源を求めるとすればノベナリオ *novenario* (もしくはノベス *novenas*)⁽²⁵⁾との関係を考えない訳にはいかない。グレミオは、聖人に対してロザリオの祈りを捧げることを主目的としており、レッドフィールドやピシャ・ロハス等が記述したノベリオとほとんど変りがない。またプレスがプストゥーニチ村に見出したノベリオ⁽²⁶⁾も含めると、形態上でも組織上でも両者の間に明確な区別を立てることはできなくなる。彼らの記述によれば、ノベリオは個人もしくは数人のグループによって主催される。その主催は9夜のうちの1夜であるが、24時間の受け持ちとされ、その終りはプロセッションによって形式化され受け継がれる。またそのプロセッションには打ち上げ花火が揚げられ楽団が伴奏する。これらの記述はそのまま今日のグレミオにも当てはまる。ノベナリオとグレミオは変移の連続線上に位置しているのである。

両者の違いを上げるとすれば、ノベナリオではロザリオの祈りが9夜であるのに対しグレミオでは数に制限がないこと、またグレミオのプロセッションには聖旗と国旗が必ず運ばれるのに対しノベナリオでは、少なくとも民族誌上、それらが見当たらないこと、そしてグレミオにおける組織としての恒常性並びに後に述べる精緻化された儀礼的側面であろう。レッドフィールドはノベナリオを行っていたある女性のグループがグレミオを結成しノベナリオに参加するようになった事例を上げている⁽²⁷⁾。しかし、これは他の村にあったグレミオを真似たものであって、決してグレミオ発生の始源を示すものではない。むしろそれはノベナリオが容易にグレミオに移行しうるものであることを示しているのだと言えよう。

レッドフィールド等の民族誌を読むとき、ノベナリオは村レベルでの祭

りの重要な一部であったことが理解される。彼は次のように述べている。「ノベナリオすなわち9つのミサは共同体としての村の、聖人に対する主要かつ必須の捧げ物を構成する⁽²⁸⁾。」「敬虔な動機付けから村の祭りの中心的な役割を進んで引き受けようとする人でさえ、彼の聖なるものへの個人的な感情とは懸け離れたある種の見返りに影響されがちである。⁽²⁹⁾」例えばリーダーシップを取ることににおける本人の名誉とか、村人のそれを引き受けることに対する期待であるとか、ここで1つの問題が浮かび上がってくる。このようなノベナリオが行なわれる場合、闘牛やバケリーアは一体誰が主催していたのか。民族誌がそれにはっきりした解答を用意していないこと、またカルガドールのような祭礼主催の重要人物への言及がないという事実は、祭礼主催に伴う社会的価値の生成及びそれに対する人々の関心がノベナリオに集中していたことを示しているのではないだろうか。

ところで、祭礼で行なわれるノベナリオは家庭で個人的に行なわれるノベナスとも同一線上にあるものである。9夜のロザリオの祈りがある特定の聖人に捧げられるという点では聖人信仰の喚喩表現であると言えよう。このような聖人信仰の喚喩表現的現実を、我々は今日のユカタンに多数見出すことができる。先ず、ユカタンの多くの祭礼が村の守護聖人ではなく、他の村から借りてこられた聖人に対して捧げられている事実はそれと関係しているであろう。たとえば、テティス Tetiz 村の守護聖母である被昇天の聖母は、かつてフヌクマー村を疫病から救った奇跡の聖母として、今日フヌクマー村⁽³⁰⁾だけでなく、キンチル Kinchil, セレストゥン Celestún, シサル Sisal 等にも運ばれ、それらの村の祭礼が捧げられる。カンサカップ村の東方三賢人像ももともとはサカツィン Sahcatzim という近くのアシエンダにあったもので、カンサカップ村の守護聖人ではない。さらにカトリックからプロテスタントへの改宗もその一つの事例として説明される。不治の病に苦しむ子どものために、親たちは聖人の助けを求めてプロテスタントにその聖人を見出すこともある。そしてその子供達が病気から回復したとき、聖人への約束を果たすために子どもだけがプロテスタントの教会へ通うことになるのである⁽³¹⁾。

IV. グレミオの運営

コフラディーアの運営が征服後の現住民社会の社会関係と密接に関係していたことは先に触れた通りである。特にファリスが指摘するところによれば、ユカタンの場合コフラディーアを中心とする社会関係の樹立は共同体の存続に向けられた人々の企図でさえあったのである。そしてそれは、マヤの宇宙を維持しようとした人々の無意識の構造とコフラディーアの小宇宙への改造の内に自らの社会的地位を維持しようとした伝統的エリートの意図において理解されるのだと彼女は説明する⁽³²⁾。別の言葉で敷衍するならば、征服以前の社会組織と重なりあったコフラディーア・村の組織は、その運営においてマヤのコスモロジー⁽³³⁾を隠蔽することになったのである。そこに伝統的エリートによる祭りの主催にはそのコスモロジーを現出させる重要な役目を帯びていた。そしてひいてはその主催が彼らの社会的地位を保障する方途になっていたのである。

ところが今日のグレミオの運営には、コフラディーア社会にとって殆ど無縁だった次の3つの問題が存在している。つまり、①成員の確保、②費用の調達、③祭りの開催の目的である。コフラディーア社会の場合、村が一つの単位となっており村の住民がコフラディーアの成員でもあった。祭りの費用は主に共有の財源庫から賄われた。そして祭りは、人々の意識には上らなくとも、エリートを抱える共同体の存続を保障するという社会的機能を帯びていたのである。これらの問題をグレミオは如何に解決しているであろうか。

1. グレミオの成員

我々は通常グレミオに付けられる名前でその団体がどのような人々によって構成されているか大体の予測が立てられる。しかしそれはあくまで一般論としてであって、全てのグレミオ会員の構成がその名前を必ずしも反映したものであるとは限らない。

表2はグレミオの名前の一例である。これらの名前から、グレミオは業種の他に社会的身分や、地域的繋り等によって構成されているであろうという

ことが容易に分かる。しかしテキット Tekit 村に代表されるように、名前はグレミオ間の区別をするために役立っている以外、特別の意味を担っていない。仮に名前に特定の理念が期待されているとしても、それは付随的なものでしかないであろう。ここに、グレミオ組織の内にその名前に代表される社会的セクターとしての特性を探る試みは、あまり意味を持たないことが予想される。むしろグレミオ組織はグレミオ間の区別すなわち相互排他性の構図の内に理解されねばならないのである。ここで誤解を避けるために、グレミオはあくまで信仰集団であり、グレミオ会員の合計が村の住民数に一致するものでないことを明らかにして置く必要があるだろう。またここで言うグレミオ組織の相互排他性とは、各グレミオの祭りにおける組織上の排他性であって、他の社会的側面に拡大解釈することは極力避けねばならない。

いかなるグレミオにおいても入会に必要な資格の規定はない。賛同者であり分担金 *cuota* を払いさえすればそのグレミオの会員として認められるのである。例えばカンサカップ村の「労働者グレミオ」には、エヒード農民⁽³⁴⁾、コルデメックス職員⁽³⁵⁾、商人、自営農民⁽³⁶⁾等が混在している。また彼らは決して親族関係によって繋っている訳でもない。彼らは、いかなる個人的理由からにせよ、いくつもあるグレミオの中から「労働者グレミオ」を選んだのである。その個人的理由には、村の中における人間関係が反映されることになるであろうが、グレミオの比較研究を目的とする本稿の議論には直接関係しない。それは個々の社会におけるグレミオを扱う場合に論じられるべき問題である。

2. グレミオの運営費用

今日のグレミオは、かつてのコフラディーアがその存立の基盤に必ず持っていたような共有財産を持たない。運営費用は殆ど、会員からの拠出金に頼っているのである。しかし拠出金の額は必ずしもその費用を満たしうるものではない。拠出金だけで祭りを行ない得るグレミオは別として、そこに不足する分を如何に補充するかが、グレミオ存続の最大の問題であるかもしれない。実際費用の不足のために消滅を余儀なくされるグレミオも、その発展史上

多々見受けられるのである。

全てのグレミオに共通して取られている対処法は、祭り⁽³⁷⁾の主権者が会食用の豚一頭もしくはそれ以上と場合によっては七面鳥数羽を付けて提供しなければならないとするものである。しかし、今日のグレミオは現金による多額の出費を余儀なくされている。表3は、フヌクマー村「自作農 *labradores* グレミオ」の1986年における支出例である。会長が負担する豚や七面鳥はこれら諸費用の総額に対する割合から見れば、それほど大した額ではない。あくまで他の会員の負担額より上回っている程度に過ぎない。確かに豚等を購入するとすればかなりの負担になる。しかし主催者に任命された時点で小豚を購入し、1年間かけて祭り用に太らせる例もあり、それらの提供は費用の肩代わりというよりも象徴的な意味合いの方が強いと言えよう。

年々増え続ける現金出費に対し、グレミオ毎に多種多様な方策が立てられる。表5は、フヌクマー村の「自作農グレミオ」の年度別の運営費用の調達方法とその調達額をまとめたものである。これによると1937年当時、運営費用の殆どは会員の分担金から成り立っていた。なおその年の祭りに要した費用は、ミサ代、楽隊依頼費、花火代合わせて90.65ペソであった。つまり代表使節のもたらす持参金を含めなくとも、会員の分担金だけで充分足りているのである。ところが1961年までにはこの使節の持参金が運営費用の40%を占めるに至っている。つまり会員の分担金だけでは足りなくなった部分を、使節の持参金に求めるようになってきているのである。

代表使節の派遣は他の村のグレミオからの祭りの費用援助の要請に対するものとして始まったと思われる。フヌクマー村「自作農グレミオ」の1937年の会計報告書には隣村テティスのあるグレミオから費用援助の要請があったことが記されている。1937年当時、「自作農グレミオ」を唯一訪れていたテジャン Texán の代表使節もおそらくは、「自作農グレミオ」がテジャンのグレミオの要請に応えたものだったのであろう。ところが費用に不足を来すようになった「自作農グレミオ」は、自らこの使節を積極的に利用拡大しているのである。表4は、「自作農グレミオ」を訪れたグレミオ使節と持参金

の額を示したものである。一つの使節に対して多額の持参金を要求することはできないため、使節の数が増やされることになる。その結果、「自作農グレミオ」には、1961年以降平均して7つのグレミオ使節が送られているのである。

使節の持参金を運営費用の収入源とするには、それなりの限界が存在している。前借りをするという事は返さねばならないということであり(使節の派遣だけを要求して返礼使節を送らず、前借りを踏み倒しているというグレミオは見掛けられない。つまり使節の派遣はグレミオ間の信頼と派遣するグレミオの威信においてなされているのであり、そこに持参金はポトラッチ的性格を帯びることも可能である。)、借り過ぎは運営費用をかえって圧迫することになる。又、持参金の限界はそれの持つ内的システムだけに限定されるものではない。1980年以降の物価上昇率は、通常1割と考えられる持参金の上乗せ率をはるかに上回っていると思われる。それに合わせた上乗せ率のアップにもかかわらず、代表使節の持参金のグレミオ運営費に占める割合が下がっているのは、それが物価上昇に追いついていないためであり、その差額は何らかの形で埋められる必要が生れる。

こうして膨張する費用の調達に、少なくとも1966年以降、役員会のメンバーが会員の分担金とは別に費用を負担するようになっていく。おそらくそれは不足した分を役員会が埋め合わせする形を取ったことから始まったものであろう。しかしその負担は、表5に明らかなようにかなりな割合を示している。これを緩和するものとして、シサル等の代表使節から区への格上げ⁽³⁸⁾、あるいは寄付金制度の導入、椅子基金の創立などいくつかの試みが行なわれている。1982年に初めて導入された一般の人からの寄付金制度は、それまで受身であった寄贈を、招待状の知人等への送付によって集めようとするものであって、手段として確立されている。これらの試みによって、役員会の負担額は一時的に緩和されたものと思われる。しかし今日、人々の収入が物価上昇率に追いついていないという現実が、グレミオ運営を一層困難な状況に追いやっていることは明らかな事実である。

今ここに紹介した例は数ある中のグレミオのほんの一例に過ぎない。その他に、カンサカップ村の「労働者グレミオ」では、資金調達を主目的とした女性だけの役員会が置かれ、15日会 quincena と呼ばれる例会で福引き等を企画運営している。マシュカヌーMaxcanú村のグレミオでは1月か2月の初めに会長の家で小バケリーアが開かれ、人々にシロップ漬けパイヤなどのお菓子が配られ、その代わりにお金が集められる。さらに祭りの前日、グレミオの役員たちが吟遊詩人に扮して会員の家を回り、セレナータを歌いお金を集めるようになっている。フヌクマー村の「靴製造販売業者グレミオ」では、毎月分担金の徴収が行なわれる。その対象となるのはフヌクマー村在住の同業者だけでなく、メリダ市内に店を構えるフヌクマー村出身の同業者も含まれている。またフヌクマー村の「柑橘類栽培者グレミオ」では、代表使節への依存度が極端に高い。そのため会長は代表使節の獲得およびの返礼のために、一年中あちこちの村を訪ねて回らねばならなくなっている⁽³⁹⁾。そしてさらに、費用の調達はグレミオ組織の企図すなわち成員全体の共同責任ではなく成員の一部の責任となっている場合すらある。「柑橘類栽培者グレミオ」の場合も次節において明らかにするようにその部類に属しているが、その典型例はフヒー村に見出される個人名グレミオであろう。数年前まで、フヒー村には5つのグレミオしか存在しなかったと言う。ところが、新任の神父が聖人に対するノベナリオの整備という目的で4つのグレミオ増設を村人に呼び掛けた。この要請に応じて、4人の有志が費用の主な出資者となってそれぞれグレミオを作ったのである。

3. グレミオの組織

以上のような費用調達の努力から見て、グレミオへの入会資格が分担金の供出だけに限られているのは、おそらく費用調達のために取られた一つの手段でもあるのであろう。そしてその事実も、必然的にあるいは意図的に準会員の存在を認めることになる。すなわち各グレミオで定められた分担金を払う正会員に対して、賛同者でありながら分担金以下の額しか払わない人々が出てくることになるのである。正会員は、普通「仲間」socio と呼ばれ、準会

員は「協力者」colaboradorあるいは「有志」voluntarioなどと呼ばれる。しかし両者における権利は必ずしも明確なものではない。会員規則を明文化させているグレミオ自体少ないのである。おそらく必要に応じて会員全体の合議にかけられるものと思われる。実際、グレミオが信仰集団でありしかも利益の追求を目的としていない限りにおいて両者の権利の区別の必要性はなくなるであろう。またグレミオは権利を要求するに足る共有財産を所有していないのである。

さて前節の最後に運営費用の調達に成員の一部の責任においてなされるグレミオが存在することを述べた。フヒー村の個人名を冠したもの、フヌクマー村の「柑橘類栽培者グレミオ」がそれに相当している。「柑橘類栽培者グレミオ」では、柑橘類栽培者がその会員をなしているが、正会員は7人の親族で占められ、彼らの間では正会員を示す「仲間」という特別の名称を使わない。ただ単に数名の協力者が準会員として *junteros* と呼ばれているに過ぎない。フヒー村の個人名グレミオにおいては当然のことながら正会員を表わす言葉はない。これらのグレミオにおいて、グレミオは成員の同意に基づいて結成される任意団体ではなく、家族あるいは個人によって所有される特殊団体をなしているのである。

ここでグレミオの正会員が閉じられた集団に限定され、しかも彼らによって所有されているのは、結局費用調達方法の必然的に結果であると言えよう。運営費用において不足する分は彼らの責任において調達されねばならないのである。彼らがその調達を断念したとき、グレミオの祭りは中止されるであろう。あるいはグレミオの所有を放棄することによってその費用の負担を誰かに委ねるかも知れない。このことは、グレミオの存続のためにはグレミオの所有あるいは運営権限は、費用負担の上に犠牲にされ得ることを示しているのである。つまりグレミオの会長あるいは役員会は、費用調達(負担)の責任から解放される代わりに、グレミオ運営における絶対的権限を失うのである。

レッドフィールド等が見出したかつてのカルガドール任命制⁽⁴⁰⁾では、最

高責任者であるカルガドールが祭礼を主催し、かつその費用の殆どを負担することにあった。ところがフヒー村の個人名グレミオとヌクマー村の「柑橘類栽培者グレミオ」を除いて、普通のグレミオの会長は一般に祭り主催の職務を負っていない。祭りの主催すなわち費用の負担者は会長職からは切り離されているのである。祭りへの家の提供及び費用の負担者は、むしろグレミオの他の成員の中から選ばれる。会長をはじめとする役員会はグレミオの組織上の雑務一般にあたるのみである。

グレミオの運営機構には通常、会長 *presidente*、副会長 *vicepresidente*、書記 *secretario*、副書記 *prosecretario*、会計 *tesorero*、副会計 *protesorero* 等からなる役員会 *junta directiva* が置かれる。この役員会は祭りの後会計報告を行ない、次の総会で新役員と入れ替わることになっている。新旧役員の入替はマヤのコスモロジーにおいて、最も儀礼化され易い部分でありかつ社会的価値を生み出す源泉になっていることは、数多くの民族誌で示すところである⁽⁴¹⁾。ところがユカタンの今日のグレミオに限ってみた場合、その入れ替えはスムーズに行なわれていない。むしろ役員職は敬遠されがちですらある。会長職に至っては、当人からの引退希望があるまで長年に渡って継続される場合が多い。あるいは、フヒー村の個人名グレミオとヌクマー村の「柑橘類栽培者グレミオ」のように最初からその入れ替えがあり得ないグレミオさえ存在している。このような、役員職に対する人々の無関心というよりも拒否的感情と言った方が適切な社会的通念は一体どこから来るのであろうか。もしかしたら、グレミオの構造に隠され、その深遠部を脈々と流れている、グレミオ発生の構図に関する人々の意識なのかも知れない。

V. グレミオのコスモロジー

次にグレミオで行なわれる儀礼そのものに目を向けてみたい。II章で紹介したグレミオにはホッチリという儀礼が存在した。しかしこの儀礼は全てのグレミオに観察される訳ではない。またその一部をなす豚の頭ダンスにしても普遍的なものではない。会員の家と教会の間にプロセッションを行なう

だけのグレミオも決して珍しくはないのである。ところで、このプロセッションの出入りする家は祭りの主催者の家と必ず関係している。ここで、プロセッションの移動にはいくつかの変種が見られる。①前年度の主催者の家を出て、当年度の主催者の家に入る場合。②当年度の主催者の家を出て、翌年度の主催者の家に入る場合。③そして当年度の主催者の家から出て、再びその家に入る場合。この最後の形式には、さらに2つの分類が可能である。(a)主催者の家が毎年変わる場合、(b)主催者の家は毎年同じである場合。後者の例はフヒー村の個人名グレミオとヌクマー村の「柑橘類栽培者グレミオ」だけに限られる。これはそれらのグレミオの所有者(すなわち祭りの主催者でもある)の入れ替が存在しないための当然の帰結である。一方、これらを除いた他のグレミオでは、原則として祭りの主催は1年毎に移動する。ここで、グレミオの会長が祭りの主催職からは免れていることを考え併せたとき、我々は次のように言い換えることができるであろう。すなわち、会長が祭りの主催を拒否した構図において、マヤのコスモロジーは祭りの主催者を中止に構造化しているのだと。こうして見た時、カンサカップ村のホッチリ儀礼は、形式上の混乱を回避するために主催職の移動⁽⁴²⁾という概念に形象が与えられるに至った例であると言えよう。

ここに、主催職の移動と会長職・祭り主催職の分離の有無を2つの弁別要素として立てることによって、グレミオを表6のように分類することができる。殆どのグレミオでは、会長が祭りを主催しない代わりに主催職の移動が行なわれる(グレミオI)。ところがフヒー村の個人名グレミオとヌクマー村の「柑橘類栽培者グレミオ」では、会長職と主催職が所有者の内に不分離の形をとっているため、祭り主催職の移動はない(グレミオIII)。グレミオIIは、祭りの主催職の移動が行なわれかつ会長(責任者)と主催職が分離していない形態である。このようなグレミオとして、今日、ヌクマー村の「自作農グレミオ」が見出される。主催職の移動がなくまた会長職から主催職が分離した形態IVのグレミオは、實際上存在しない。このことは主催職の移動が行なわれるのは会長(責任者)が祭りの主催を拒否した構図においてであり、

しかもそれは祭りの主催者を中心にコスモロジーが構造化しようとする試みであったことを反証するものであろう。つまり祭り主催職の移動の伴わない会長と主催職の分離は不可能である。そのようなグレミオの出現はマヤのコスモロジーの崩壊を意味することになる。

会長と主催職の分離していないグレミオのうち形態IIIに属すものは、先にも触れた通り費用の調達が優先されたものである。そこに祭りの主催者は必然的にグレミオの会長と一致せざるを得ない。誰か一人が祭りを主催するという構造において、それは依然マヤのコスモロジーの範囲内にあると言えるのかもしれない。あるいはこの形態はマヤのコスモロジーの枠内で合理性を極端に追求した結果なのかもしれない。しかしこのグレミオにおいて、プロセッションはグレミオの所有者と教会すなわち聖人とを繋ぐ意味に、完全にすり替えられることになる。これらのグレミオにおける祭りは、もはやマヤのコスモロジーの構造化への試みではなく、所有者と聖人との間だけの取引を保障する手段となっているのである。

グレミオIIに分類されるフスクマー村の「自作農グレミオ」の場合、教会を中心に東西南北に村が分けられ、毎年1つの地区から4つの地区を代表する会長が選ばれる。グレミオは前年度の会長の家から出て教会に一晩置かれた後、当年度の会長の家に運ばれる。会員(positivoもしくはsocioと呼ばれる)は120人にも及びグレミオの中では最大規模のものである。しかもその会員数が減らないように、会員は世襲制が取られている。つまりこのグレミオ組織は、それ自体で一つの宇宙構造を持っているのであり、強い統合力によって維持されているのである。ここに会長による祭りの主催は、その統合力を保障する象徴的仕掛けとしての役割を持っていることが予想される。

少なくとも、他のグレミオでは、グレミオの移動において村落空間を用いてはいても、それは祭りの主催職移動を示すためのものであって、「自作農グレミオ」のように会員組織面における村落空間の利用はない。つまり、形態Iに属す普通のグレミオが作り出す宇宙は、会員の組織においてのみ現出するものであり、会員の構成は問題とならない。極端な表現をすれば、会員は

一人でも二人でも構わないのである。しかし村落空間を利用して会員を集めようとする場合、グレミオに対する会員の統合力が問題となるはずである。そこに会長の存在には、かつてコフラディーア社会が持っていたのと同じようなストラテジックな側面が与えられる必要があったことが伺われる。

「自作農グレミオ」における会長のこのような役割はその運営方法にはつきりと見てとることができる。多くのグレミオが会長職と祭り主催職の分離を採用していく中で、「自作農グレミオ」もその方式を採り入れることができたはずである。にもかかわらず、会長が祭りを主催し続けているのは、会長の負担額を最小限度に留めようとするグレミオ内部での努力があったからであり、その努力自体会長による祭りの主催をグレミオ統合の象徴にしようとする意図があったからだと理解されよう。IV章第2節で明らかにしたように、「自作農グレミオ」では、必ずしも会長の負担を増やす方向には進まず、むしろそれを回避する方向でいくつかの方法が講じられているのである。おそらくそこには、会長による祭りの主催を容易なものにしようとする人々の配慮があったに違いない。それは取りも直さず、会員に対する統合力を維持するために、会長職と祭りの主催職の分離だけは避けようとした人々の意図だったのであり、また祭りの主催を引き受けることで会長に付与されている社会的意味あるいは価値を奪い取ろうとする試みは一切なされてこなかったことを意味しているのである。

全てのグレミオにおける祭礼費用調達への努力とさらにはその最優先は、祭りの主催者選出すなわちコスモロジーの継続を容易なものにしようとするグレミオ組織の意図を示しているのではないだろうか。祭りの構造的価値すなわちマヤのコスモロジーが維持されるためには、少なくとも祭り主催者が選出される必要があったはずである⁽⁴³⁾。つまり会長が祭りの費用負担を拒否する構図において、会長の存在は祭りの意味構造からは離脱し、代わって費用負担者を中心とする構造化が進んで行ったはずである。そこに役員交代は祭礼と関連した重要性を失い、単なる組織上の事務的手続きの問題に帰せられていくことになるのである。すなわちここにグレミオの役員職が人々の

関心から引き離されていく原風景が存在する。グレミオIIとIIIは、その当初の意図は別としてその閉鎖性の内に役員の特権構造が救済されている特殊な例であり、それ故に他のグレミオでは成員権が開かれていなければならなかったことを示している。

結局、ユカタンの人々が役員職に社会的価値の源泉を見出そうとしないのは、それに付随する権利や義務あるいは奉仕と報酬の均衡不均衡の問題以前に、役員職がコスモロジーにおいて脱構造化しているからに他ならない。それ故に、グレミオの会長をはじめとする役員は祭り主催の責任を免れているのである。このようなグレミオの運営とそれに対する人々の感情は、会長による主催拒否の構図において決定され方向づけられているのである。

結 び に

歴史上におけるグレミオの実際の発生年代は不明であるが、前章の考察は主催者の不在状況が社会的現象として普遍的に起こった時代であったことを示唆している。私が知り得た中でも最も古いグレミオはフヌクマー村の職人 *artesano* グレミオ (1890年創設) であった。これを19世紀前半頃にコフラディーアが解体されていった事実と突き合わせたとき、現在のようなグレミオの最初の発生は、19世紀半ば以降のことだったと言えよう。

ただここで、この時代に祭礼の主催者不在状況が実際に起こったのか、また仮に起こったとしてそれがグレミオにおける会長の主催拒否とどのように関係しているのかという問題が残されることになる。しかし、コフラディーア財産の消滅によって祭礼費用の個人負担を余儀なくされた伝統的エリートが祭礼主催を拒否していった可能性は充分考えられるし、また競り落とし請負人もノバナリオも祭礼を主催する中心人物の不在の可能性を示しているのであり、その問題は、むしろ、祭礼主催者の不在とグレミオの会長による主催拒否とがグレミオの発生の構図において如何に関連しているかを説明する理論的要請の問題として存在するのである。ここに、構造の起源と歴史的起源とが対峙することになる。つまり我々は記憶の歴史への介入の痕跡を見い

出したのである。あとは、マヤのコスモロジーが記憶において如何に操作されたのか、すなわち、記憶の歴史への介入は如何に行なわれたのかといった技術的な面に関わる問題だと言えよう。その問題は別稿で改めて取り上げるとして、本稿では最後にユカタン社会におけるグレミオの発展について軽く触れて置きたい。

今日ほとんど失われてしまったカルガドール任命制では、豚の頭ダンスを主とする祭礼主催者受け継ぎの儀礼が行なわれていた。それらの伝統的な祭礼組織の消失とグレミオの発達との歴史的契機としての時間上の一致だけに目をやったとき、グレミオに見られるその儀礼はカルガドール任命制等に見られた儀礼的伝統の継承として捉えることもできる。グレミオはカルガドール任命制等が持っていた祭礼の精神を受け継いでいることになるのである。しかし、カルガドールが祭礼全体の主催を請負っていたのに対し、グレミオの責任者はロザリオの祈りに付随するグレミオだけの祭りを請負うに過ぎない。この組織上の違いを無視して両者の儀礼における構造的意味の連続性を決定することはできないであろう。仮にカルガドール任命制等の消失をグレミオの発達が何らかの点で補っているにせよ、儀礼的伝統の構造上の一致は今世紀における両者の関係を明らかにするものではない。ここにグレミオの発生とその発達は分けて考える必要があることが示されている。すなわち、グレミオとカルガドール任命制等との儀礼の構造上の一致は、必ずしも狭い意味での精神の継承を意味するのではなく、それ以前の儀礼的構造からの連続性及びそれに対する二つの異なる表現形式である可能性を示しているのである。

グレミオとノベナリオとの違いについては先に述べた通りであるが、両者ともにマヤのコスモロジーの伝統であると考えたとき、さらに明確な関係が表われる。ノベナリオにおける主催者の交代は一日単位で行なわれ、一つの祭礼に複数のグループが平行して存在している。仮にその主催の形式を横型コスモロジーとするならば、グレミオの主催者交代は、その横型コスモロジーと同時に各年の祭礼毎に行なわれるすなわち縦型のコスモロジーをも示して

いるのである。これは、最初独自に存在したグレミオのロザリオの祈りもグレミオの複数化によってノベナリオ化されていったためであろう。

このようなグレミオとノベナリオのコスモロジーにおける表現形式の違いは、祭礼主催者不在状況に対する別々の対処法と見なすことができるであろう。主催者の不在すなわち祭礼の中断に際して、グレミオは主催者の構造的存在を継続した。他方、ノベナリオはそれを排除し主催の形式に祭礼を求めたのである。グレミオは決してノベナリオが個別化し、個々に組織化された結果ではない。両者は同時発生的である。ただし、それはノベナリオが主催者不在状況において発生したことを意味するのではなく、ノベナリオが主催の形式を担うようになったことを指している。

ノベナリオにおける主催の形式化がマヤのコスモロジーを受け継いだものだとしても、それは結果としてコスモロジーの忘却をもたらしている。つまり横型のコスモロジーにおいて、主催は特定の個人あるいはグループの所有物へと変貌していく。コスモロジーの継続のために祭礼費用を9等分したはずのノベナリオはそのコンテクスト離れ、主催者同士の間にも他の社会的コンテクストを生み出していく。主催に内在したコスモロジーのメタファーは薄れ、社会的名誉等を示すメトニミーへと移行するのである。そこに、聖人へのロザリオの祈りはリテラルに捉えられ、祭礼は聖人信仰だけを表示する。人々はもはやそこにマヤのコスモロジーを連想する想像力を失い、祭礼存続のメタファーは聖人との閉ざされた契約の内に陥没せざるを得なくなるのである。この場合グレミオにしても決してその例外ではない。

今日、祭礼において人々が頻繁に口にする「聖人への約束」といった表現は、祭礼におけるメタファーがマヤ・コスモロジーから聖人信仰へ移行していることを示すものであろう。そこに、祭礼が聖人信仰のメタファーで捉えられる限り、如何なる祭礼的要素も「聖人への約束」と見なされるであろう。そして商業的利益の有無にかかわらず、グレミオは元より聖人に捧げられたバケリーアや闘牛、あるいは社交ダンス、仮設遊園地、賭ごと等全てに聖人信仰のレットルが貼られることになる。それらを企画・誘致する競り落とし

請負人は、現在のユカタンの祭礼に聖人信仰のメタファーを定着させている張本人なのかもしれない。

註

- (1) R. Redfield, 1941, The Folk culture of Yucatan 1930年代のユカタン社会を都市・民俗文化の連続性の上に位置づけようとした文化人類学の古典。
- (2) 16世紀のユカタンの風土・風俗・習慣等に関するユカタン司教ランダの記録。
- (3) マヤの太陽暦で1年の最後の5日間はウァイエブと呼ばれ、新年を迎えるための祭儀が行なわれた。詳しくは『ユカタン事物記』第35～38章参照。
- (4) フラクタルという概念は、常に変化する自然現象を数式によって表わそうとするものである。極めて複雑に時にはカオス的に起こるように見える自然現象も、実はある一定のパターンに従っている。生物の記憶力もその例外ではないのではないだろうか。特に人間の場合、後天的にある種のパターンを獲得する時、しかもそれが社会的に共有される時、文化と呼ばれる次元が現われるのだと言えよう。
- (5) 本稿で用いる資料の多くは、筆者が1985年12月～1986年2月、6月に行なった現地調査に基づいている。
- (6) 以下、村とは集落としての pueblo を指す。ユカタンの集落は、基本的に東西南北に出入口を持ち、村の中央には教会、広場、役場等の公共機関・施設が置かれており、世界の四隅をパカブ神が支え、中央にヤシュチェーの木がそびえるとする古代マヤの宇宙観(コスモロジー)を村落空間に記憶している。
- (7) 村祭りの最初の夜に開催される民俗舞踊会、メスティソ衣装(男性は白いズボンに白いフィリピーナ・シャツ、白いパナマ帽、赤いバンダナ、アルバルガタ。女性はテルノ terno に白いダンス用ハイヒール、レボッソ)でハラーナ jarana を踊る。今日、第1曲目は Aires yucatecos そして最後の曲は El torito という意識が定着している。
- (8) 闘牛場は50～70のバルコ palco と呼ばれる観覧席を繋ぎ合わせて作られる。人々はこのバルコ建設の権利を競り落とし請負人から買い取り、自前でバルコを建設する。
- (9) 聖人という場合聖母も含む。また東方の三賢人等本来正当なカトリック教義においては聖人とは認められない場合もあり、「奇跡を起こす聖なる存在」全体の総称と考えられるべきである。
- (10) 祭礼は「約束」を果たす機会であるとする考えは、すでにレッドフィールドの記述の中にも見られる。[Redfield, 1941, p. 272]
- (11) 聖火リレーは近年グアダルーベの聖母の火を運ぶことから始まったものらしい。聖火は途中で何度も消えその度に自分たちの手で火がつけられる。彼らにとっては、聖火そ

のものより走ることで「約束」を果たす上で重要な意味を持っているのである。

- (12) スペイン起源の清涼飲料水であるが、かやつり草のかわりに米が用いられる。
- (13) 1 m 位の棒に直径 30 cm 位の杵がいくつか付けられそこから色紙の吹き流しが垂らされたもの。フスクマー村には 2 m 位の棒の先に花が付けられたものもあった。ラミジェテは豚の頭と伴に祭礼主催職の受け継ぎ儀礼に用いられるものである。レッドフィールドは祭りの最後の日に、その年の主催者がこのラミジェテを持って、翌年度の主催者に対し責任職の引き渡しの言葉を述べ、後者もそれを受け取り、祭りを必ず遂行することを誓ったことを記している。[*ibid.*, p. 289]
- (14) 祭礼主催者 *cargador* の受け継ぎ儀礼が済むと、主催者の協力者 *nakulo'ob* となる人達がテーブルに置かれた品物を手に持ち踊ること。その後彼らの間でそれを分配し、主催者を援助することを表明すること。そして、彼らは受け取った品物を次の年の祭りの時に 2 倍にして返さねばならないことをレッドフィールドが報告している。[*ibid.*, p. 289]
- (15) G. フォスターはコフラディーアとグレミオの発展に、1. 宗教的慈善コフラディーア (*cofradía religioso-benéfica*)、2. 同業者的コフラディーア (*cofradía gremial*)、3. コフラディーア・グレミオ、4. グレミオの 4 段階を考えている。つまり、第 1 段階では相互援助と宗教的信仰がその目的であり、その組織も任意の加入によって行なわれる。第 2 の段階では、成員権に特別制限はないが、都市生活上の理由から同業者が集まるようになる。第 3 の段階では、成員が同業者に集中するようになり、その活動も宗教的枠組を越えてその業種内の規則を生むようになる。そして最終段階になると純粋に経済的な側面が第一義を占めるようになる。この段階でコフラディーアとグレミオの区別は明確なものとなるとしている。[George M. Foster, 1953, pp. 1-28]
- (16) Luis Weckmann, 1983, pp. 478-484
- (17) Foster, p. 18
- (18) *Ibid.*, p.22; Weckmann, p. 481
- (19) *Negroes Sierra*, p. 23
- (20) Bricker, 1981
- (21) Gibson; Farriss, p. 265
- (22) Farriss, p. 266
- (23) *Ibid.*, chap. 12
- (24) Weckmann, p. 482
- (25) ノベナスとノベナリオは同義に使用されることも多いが、混同を避けるために、便宜的に村の祭礼で行なわれる 9 つのロザリオの祈りをノベナリオ、家庭レヴェルで行なわ

れるものをノベナスと呼ぶことにして置く。

- (26) 原文ではノベナスとなっているが、(25)の理由からノベナリオに変えている。
- (27) Redfield, op. cit., p. 296
- (28) Ibid., p. 272
- (29) Ibid., p. 273
- (30) ファリスは、フヌクマーの聖母に敬意を表するためにテティスの聖母が運ばれてくるのであり、そこにはかつての首村と従属村との関係が残されているのだという。[Farriss, p. 151]
- (31) 病人の救済という点では、聖人信仰はマヤ土着の治療儀礼の隠喩表現でもあり次の関係が成り立つ。聖人信仰：約束 promesa = マヤ信仰：交換 cambio, kex
- (32) Farriss, part 3
- (33) コスモロジーは、大は宇宙体から小は身体部位に至るまでを体系的に捉えようとする認識の形式としてここでは理解しておく。なお、ファリスにおいては宇宙の秩序の図式として使われている。ところで、マヤ社会では、パカブ神に象徴されるように、cuch (荷)すなわち世界を背負うことがコスモロジーの根底にあったと考えられる。しかもそのクーチは毎年の別のパカブ神に渡されねばならなかった。[Coe; Landa; E. Thompson]そこに、そのクーチを背負う者には、コスモロジーによって、保障された社会的価値が集中すると同時に、その受け継ぎが制度されて行くと考えられる。
- (34) カンサカップ村のエヒードはエネケン畑であって、実質上国家から前払い賃金 créditoを受け取る賃金労働者。
- (35) Cordemex (エネン公社)の従業員。
- (36) ここではエネケン公社から土地を借りて換金作物を栽培する小作農民 parcelario をさす。
- (37) グレミオにおいて、プロセッションを行ない、ロザリオの祈りを捧げさらに主催者の家で小宴を開くことを人々は「祭りを行なう」とは言わず、「グレミオがある」という表現をする。しかもグレミオが、「始まる」、「終る」、家に「入る」、家から「出る」といった表現もなされる。このことはグレミオが単に祭祀集団(信仰集団)を指すばかりでなく、その集団が行なう宗教的行為そのものをも意味しているのである。本稿ではグレミオの組織とその祭りを分けて考えるため、後者を指す場合単に「祭り」とするものとする。なお村全体の祭りには極力「祭礼」という表現で統一している。
- (38) シサルの他に、1978年に Huncanab, 1979年に Chelem, 1986年に Progreso が区レベルの分担金として計上されている。このようなフヌクマー村以外の区への格上げは、将来、村を4分割する宇宙論的構造の忘却をもたらすことが予想される。

- (39) 1986年このグレミオには以下に代表使節が訪れた。Tetiz (Sembradores), Kiní (Agricultores), Kinchil (Sociedad de donativos de la Santísima Virgen), Ucú (Obreros, campesinos, señoras y señoritas), Kanasín (A Santo Cristo), Tepich (Campesinos), Huncanab (Ejidatarios), Dzitya (Campesinos y señoras), Seyé (Promesa a la purísima Viregen de la Concepción), Sanahcat (Señoras en honor de Santo Cristo), Muxpip, Samahil, Cansahcab (Fe, esperanza y caridad)
- (40) レードフィールドの調査当時、伝統的な祭礼の組織方法として、一人のカルガドールと数人のナクローが村人の中から毎年選ばれるものがあった。また祭礼の費用が数人のディプタード *diputado* と呼ばれる人に均等に配分されるやり方もあった。現在でもチェマッシュ *chemax* ではこの方法がとられ、毎年12人のディプタードが選ばれる。なお、カスタ戦争後東部ユカタンの辺境に逃げこんだマヤ人の間では、5つの下位部族から、それぞれ4人の責任者が選ばれていた。
- (41) Gricker, 1973
- (42) カンサカップ村では主催希望者がどうしてもいない場合「保留」*reserva* と呼ばれ、グレミオの会長が主催を引き受けることもある。つまり、(21)でも述べたように、グレミオはその祭りを行なうという意識において形成されているものである。
- (43) ここでグレミオレヴェルでの「祭り」と村レヴェルでの「祭礼」がコンテクストを共有し始める。しかしそれは決して、いたずらな論理階型の混同ではない。むしろ現象としての一致が論理的に説明される必要性を示しているのである。

参考文献

- Bricker, Victoria R., *Ritual Humor in Highland Chiapas*, Austin, University of Texas, 1973
- , *The Indian Christ, The Indian King: The Historical Substrate of Maya Myth and Ritual*, Austin, The University of Texas Press, 1981
- Chance, Jone K., & Taylor, William B., "Cofradías and cargos: an historical perspective on the Mesoamerican civilreligious hierarchy", in *American Ethnologist*, 12 (1): 1-26, 1985
- Coe, Michael D., "A model of ancient community structure in the Maya lowlands", in *Southwestern Journal of Anthropology (SJA)*, 21 (2): 97-114, 1965
- Farriss, Nancy M., *Maya Society under Colonial Rule: The Collective Enterprise of Survival*, New Jersey, Princeton University Press, 1984

- Foster, George M., "Cofradía and compadrazgo in Spain and Spanish America", in *SJA*, 9 (1): 1-28, 1953
- Frank, Cancian, *Economics and Prstige in a Maya Community: The Religious Cargo System in Zinacantán*, California, Stanford University Press, 1965
- Gibson, Charles, *Los Aztecas bajo el Dominio Español (1519-1810)*, México, Siglo Veintiuno, 1984 (1964)
- Gómez Narvarte, Celinda, "Ceremonia de'El baile de la cabeza del cochino", in *Boletín de la Escuela de Ciencias Antropológicas de la Universidad de Yucatán* (BECA), 2: 25-28, 1973
- , "Ceremonia de'El baile de la cabeza'en el Sur del Estado", in *BECA*, 2: 15-18, 1973
- Gremio de Labradores de Hunucmá, *Actas (1936-1986)*
- Gudeman, Stephens, "Saints, symbols and ceremonies", in *American Anthropologist*, 3 (4): 709-729, 1976
- Irigoyen, Renán, *Calendario de Fiestas Tradicionales de Yucatán*, Mérida, México, 1973
- Jones, Grant D. (editor), *Anthropology and History in Yucatán*, Austin, University of Texas Press, 1977
- Landa, Diego de, *Relación de las Cosas de Yucatán*, México, Biblioteca Porrúa 13, 1978
ランダ,「ユカタン事物記」, 大航海時代叢書 13所収, 林屋永吉訳, 1982年, 岩波書店
- Mendelson, E. Michael, "Ritual and mythology", in *Handbook of Middle American Indians (HANDBOOK): Vol. 6 Social Anthropology*, Austin, The University of Texas Press, 1967
- Negroe Sierra, Genny M., "La cofradía yucateca en el siglo XVII", in *Cuatro Ensayos de Historia Yucateca*, Bojórquez Urzaiz, Carlos, et al., pp. 19-39, Mérida, México, 1985
- Patch, Robert, "La formación de estancias y haciendas en Yucatán durante la Colonia", in *Cuatro Ensayos Antropológicos*, Mérida, México, 1979
- , "Una cofradía y su estancia en el siglo XVII, Notas de investigación", in *BECA*, 8 (46-47): 56-66, 1981
- Pohl, Mary, "Ritual continuity and transformation in Mesoamerica: Reconstructing the ancient Maya cuch ritual", in *American Antiquity*, 48 (3): 513-529, 1981
- Press, Irwin, *Tradition and Adaptation: Life in a Modern Yucatan Maya Village*,

- Wesport, USA, Greenwood Press, 1975
- Redfield, Robert, *The Folk Culture of Yucatan*, Chicago, The University of Chicago Press, 1941
- , “Raza y clases en Yucatán”, in *Enciclopedia Yucatanense Tomo VI : Yucatán Actual*, México, Gobierno de Yucatán, 1977
- , and Villa Rojas, Alfonso, *Chan Kom : A maya village*, Chicago, The University of Chicago Press, 1934
- Reed, Nelson, *The Caste War of Yucatan*, California, Stanford University Press, 1964
- Reina, Ruben E, “Annual cycle and fiesta cycle”, in *HANDBOOK*, pp. 317-332
- Roys, Ralph L., *The Indian Background of Colonial Yucatan*, Norman, University of Oklahoma Press, 1972
- 高安秀樹, 『フラクタル』朝倉書店, 1986年
- Thompson, J. Eric S., *Maya History and Religion*, Norman, The University of Oklahoma Press, 1970
- Thompson, Richard A., *The Winds of Tomorrow : Social Change in a Maya Town*, Chicago, The University of Chicago Press, 1974
- Varguez Pasos, Luis A., Informe trimestral (Julio-Septiembre), Departamento de Estudios sobre Cultura Regional, Centro de Investigaciones Regionales “Dr. Hideyo Noguchi”, 1980
- Weckmann, Luis, *La Herencia Medieval de México II*, México, El Colegio de México, 1984

表1 カンサカップ村三賢人祭行事日程 (1980年度)

| 日付 | 公式プログラム | | |
|-----------|--------------------------------|---------------|---------------------|
| 12月28日(土) | 闘牛場建設開始, 夜店設置開始 | | |
| 12月29日(日) | バルケロー最終確認 | | |
| 12月30日(月) | グレミオ (Fe, esperanza y caridad) | | |
| 12月31日(火) | グレミオ (Obreros) | | |
| 1月1日(水) | グレミオ | | |
| 1月2日(木) | グレミオ | | |
| 1月3日(金) | グレミオ | 聖火リレー (ハラチョー) | バケリーア |
| 1月4日(土) | グレミオ | 聖火リレー (カンクン) | 闘牛&社交ダンス |
| 1月5日(日) | グレミオ | 聖火リレー (シサル) | 闘牛&社交ダンス |
| 1月6日(月) | グレミオ | 聖火リレー (ティシミン) | 闘牛&社交ダンス プロセッション |
| 1月7日(火) | グレミオ | | |
| 1月8日(水) | グレミオ | | |
| 1月9日(木) | グレミオ | | |
| 1月10日(金) | グレミオ | | |
| 1月11日(土) | グレミオ | | 闘牛&社交ダンス |
| 1月12日(日) | | | 闘牛 |

表3 グレミオの支出例 (フヌクマー村
「自作農グレミオ」, 1986年)

単位: ペソ

| | |
|----|---------------------------------|
| ミサ | 6.000 |
| 花火 | 36.700 |
| 楽団 | 35.000 (ハラーナ10.000/マリアッチ25.000) |
| 料理 | 75.000 |
| 雑費 | 17.850 |

表6 グレミオの形態

| 形態 | 主催職の移動 | 会長職と主催職の分離 |
|-----|--------|------------|
| I | + | + |
| II | + | - |
| III | - | - |
| IV | - | + |

表2 グレミオ名称

| 村落名 | 名 称 |
|-----------------------|--|
| Ticul ^{a)} | Zapateros, Sombrereros, Panaderos, Ferrocarrileros, Ganaderos, Señoritas, Señoras, Interesados, Santa Cruz, Unión Católico, Potters, Tobacco buyers, Minor businessmen, Musicians, Urban workers, Large farmers, Small farmers, Tobacco growers |
| Hunucmá | Labradores (1900年), Comerciantes (1924年), Filarmónicos (1950年), Albañiles, Señoras (1953年), Señoritas, Zapateros (1958年), Carretilleros, Camioneros (1965年), Carboneros, Campesinos, Ejidatarios, Unión y fuerza, Esperanza, fe y caridad, Ejidatarios y campesinos, Niños y niñas, Unión y trabajo, Sembradores de cítricos (1980年), Cazadores (1980年代), Espíritu Santo (1986年) |
| Maxcanu ^{b)} | Ferrocarrileros, 1ª sección, 2ªsección, 3ªsección, 4ªsección, 3ªparticular, Mestizas populares, Señoras y señoritas, Artesanos, Mestizaos, Mestizas devotas, Asociación juvenil de agricultores |
| Huhí | 名称不明。ただし寄合によるグレミオ(5)、個人名のグレミオ(4) |
| Tekit | La sagrada familia (1964年), León VIII (1946年?), PioX, Pio XV, San Rafael, San José, San Pedro y San Pablo, Viva Cristo Rey, La sagrada Eucaristía, De la bajada (1986年) |
| Chemax | Chicleros (1939年), 他不明 |
| Tsucacab | Labradores, Señoras, Señoritas |
| Cansahcab | Obreros, Fe, espereanza y caridad, 他11団体名称不明 |
| Tinum | Comeriantes y obreros (1930年代), Agricultores, Apicultores, Señoritas, Señoras, Jóvenes |
| Texán | Ejidatarios, Obreros, Jornaleros, Labradores, Señoras |
| Sihó | Señoras y señoritas, Unión juvenil, Unión de trabajadores, Unión obrera, Unión católica |

a) Thompson, 1974 より

b) Vázquez, 1980 より

表5 グレミオ運営費用の推移(フスクマ-村自作農)

単位：ペソ

| 収入源 | 1937 | 1961 | 1966 | 1973 | 1974 | 1975 | 1976 | 1979 | 1981 | 1982 | 1984 | 1985 | 1986年 |
|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|---------|---------|
| 分 | 27 | 226 | 260 | | | | 751 | 1,237 | 1,827 | 4,141 | 9,253 | 15,141 | 27,286 |
| 第1区 | | | | | | | | | | | | | |
| 第2区 | 20 | 122 | 104 | | | | 328 | 627 | 1,190 | 4,000 | 5,558 | 4,804 | 16,523 |
| 第3区 | 45 | 289 | 393 | 1,460 | 1,956 | 2,099 | 1,670 | 1,732 | 3,545 | 5,550 | 12,403 | 20,213 | 42,628 |
| 第4区 | 40 | 302 | 164 | | | | 649 | 1,244 | 1,240 | 2,357 | 4,467 | 17,097 | 25,337 |
| 金 | | | | 207 | 224 | 276 | 323 | 760 | 1,959 | 3,200 | 7,203 | 11,618 | 19,923 |
| Sisal | | | | | | | | | | | | | |
| その他 | | | | | | | | 363 | | | | | 11,649 |
| 使 | 16 | 655 | 522 | 607 | 655 | 765 | 1,025 | 1,450 | 2,100 | 2,640 | 4,000 | 6,450 | No Data |
| 役 | | | | | | | | | | | | | |
| 節 | | | | | | | | | | | | | |
| 会 | | | | | | | | | | | | | |
| 付 | | | | | | | | | | | | | |
| 員 | | | | | | | | | | | | | |
| 寄 | | | | | | | | | | | | | |
| 総 | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 148 | N.D. | 2,291 | N.D. | N.D. | N.D. | N.D. | 13,910 | N.D. | N.D. | N.D. | 134,123 | N.D. |
| 使 | 11% | 41%* | 23% | 18%* | 16%* | 9%* | 13%* | 10% | 18%* | 10%* | 7%* | 5% | |
| 節/総計 | | | | | | | | | | | | | |
| 使 | | | | | | | | | | | | | |
| 節/総計 | | | | | | | | | | | | | |
| 役員/総計 | | | | | | | | | | | | | |
| 役員/総計 | | | | | | | | | | | | | |

*印の付された数字は既知の収入の合計に対する百分率であり実際にはもっと低くなるはずである
出所 Actas del gremio de Labradores de Hunucmá より作成

表4 代表使節とその持参金

| 村落名 | 単位：ペソ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-------|
| | 1937 | 38 | 61 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85年 |
| Texán | 15.5 | 19 | 132 | 185 | 185 | 190 | 190 | 200 | 200 | 200 | 200 | 200 | 250 | 280 | 250 | 400 | 500 | 650 | 1,000 | 1,000 | 1,500 |
| Ticopó | 5.3 | 93 | 37 | — | 39 | 54 | 65 | 90 | 95 | 200 | 350 | 350 | 350 | 450 | 350 | 600 | 630 | 650 | 1,000 | 1,300 | |
| Halachó | | 60.5 | — | 37 | 35 | 35 | — | 57 | 65 | 65 | 105 | — | 140 | — | — | — | — | — | — | 220 | |
| San Ignacio | | 70 | 80 | 82 | 85 | 90 | 100 | 105 | 105 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | | | | | | |
| Komchén | | 57 | 60 | 45 | 45 | 45 | 30 | 45 | 45 | 50 | — | — | 85 | 100 | 100 | 100 | | | | | |
| Komchée | | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 | 60 | 75 | 80 | 100 | 100 | 110 | 140 | | | | | | | |
| Kikteil | | 50 | 52 | 60.5 | 45 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Huncanab | | 53 | 40 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Sisal | | 99.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Tetiz | | 28 | 20 | 22 | — | — | — | — | — | — | 70 | 80 | 140 | 150 | 200 | 250 | 300 | 300 | 350 | 550 | |
| Komchén | | | | | | | | | 50 | 70 | 70 | 100 | — | 100 | 110 | | | | | | |
| Komchén | | | | | | | | | | | | | 150 | 150 | | | | | | | |
| Ticopó | | | | | | | | | | | | | | | 200 | 350 | 370 | 600 | 500 | 600 | |
| Ticopó | | | | | | | | | | | | | | | 150 | 300 | 350 | 380 | 450 | | |
| San Bernardino | | | | | | | | | | | | | | | 100 | — | — | 200 | | | |
| Ticopó | | | | | | | | | | | | | | | 100 | | | | | | |
| Yaxché | | | | | | | | | | | | | | | | 150 | 250 | — | 700 | | |
| Hunucmá | | | | | | | | | | | | | | | | 500 | 600 | 700 | 700 | | |
| Becal | | | | | | | | | | | | | | | | 650 | 700 | | | | |
| Kinchil | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 600 |
| Kinchil | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 500 |

出所 Adas del gremio de Labradores de Hunucmá より作成

本稿関連地名概念図



